



悠久の京を訪ねて Part II Vol.3

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土物により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

いにしえびととにわとり鶏の関わり

鳥と鶏

鳥は、古くから人との関連が深く、弥生時代や古墳時代の文化と密接に繋がっていました。

弥生時代では、五穀豊穡を願ったものでしょうか、絵画土器や銅鐸に鳥のモチーフが好んで用いられています。

古墳時代になると鳥のかたちを模した埴輪が作られます。それは鶏と水鳥に分類されます。このうち鶏は弥生時代から人に飼われていたこともあって、身近に接する機会が多いため、その細部までリアルに表現され誰がみても鶏とわかるものです。



上人ヶ平5号墳出土の鶏形埴輪

京都府木津川市



府内出土の鶏形埴輪と役割

木津川市上人ヶ平5号墳からは、鶏形埴輪の頭部が出土しています。鶏冠とんぼや小さな点で表された目や尖ったくちばしを表現しています。また、上人ヶ平1号埴輪窯出土の鶏形埴輪にも、長くのびる首や目のように見えるボタン状の耳朶みみ（耳たぶのようなもの）、鶏冠を確認することができます。

この埴輪は、埋葬施設の上に造られた祭壇に置かれることが多いもので、本来は古墳上の葬送儀礼に欠くことができない重要な役割を果たしていたと考えられています。

「鶏鳴」という言葉は、日の出を表現する言葉ですが、鶏形埴輪は古墳の上で行われた儀式的終了を告げる役割を果たしたものかもしれません。



上人ヶ平1号埴輪窯出土の鶏形埴輪